

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
MSM の HIV 感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究

ロジックモデルを用いた CBO による HIV 啓発活動のプロセス評価
- コミュニティに根差したaktaによるアウトリーチ型HIV 予防啓発活動のプログラム評価 -

研究分担者：本間隆之（山梨県立大学看護学部 講師）

研究協力者：荒木順子、佐久間久弘、木南拓也（公益財団法人エイズ予防財団/特定非営利活動法人 akta）、阿部甚兵、大島岳、柴田恵（特定非営利活動法人 akta）、岩橋恒太（名古屋市立大学看護学部/特定非営利活動法人 akta）

研究要旨

目的：新宿二丁目にある特定非営利活動法人 akta（以下、akta）が行っているアウトリーチ活動に関するプログラム評価を行った。初年度から 3 年間かけて行ってきたロジックモデルにのみ依拠するプログラム評価を改め、米国 CDC の提唱する Framework for Program Evaluation in Public Health を参考にして、プログラムの記述を試みた。

方法：akta のアウトリーチプログラムに関わるコアスタッフに協力を依頼した。平成 23 年度及び平成 24 年度に行ったこれまでのワークショップ及び聞き取り調査から得られた知見を用いてプログラムと対象に関する記述を作成した。これを用いてワークショップを行い、作成した記述に関する意見を聴き、修正することを繰り返した。

結果：akta がプログラムの対象についてどのように理解してプログラムを運営しているのかについて記述を行った。akta のスタッフが個々に持っていたアウトリーチプログラムに関する理解を可視化した。加えて、モデルに基づいた評価指標の案を提示した。

考察：ロジックモデル単独で記述を行う場合に比べて、プログラムに関する幅広い理解を得ることができ、さらにスタッフの納得が得られたという点で妥当性の高いプログラムの記述を行うことができた。具体的な評価指標案を提示することによって、プログラム評価の有用性についてより深い理解が得られたと考える。Community Based Organization（以下、CBO）によって実施されている複雑な要素を持つ HIV 予防介入プログラムの内容と目的を明確に記述するという目的において、関係者間で協議しながら記述していくロジックモデルを軸としたプログラム評価は最適な手法であると考えられる。しかし、ロジックモデルの作成方法及び活用方法にはさらなる独自の工夫を要する。また、エンパワメント評価の視点からは、ロジックモデルの構築過程における議論や参加者の考えの変化などが評価研究の重要な成果の一部であるため、これを適切に記述できるように内容の記録や参加者の振り返りを記録していくことも重要である。CBO が行っている複数のプログラムは相互に補完しあいながら機能していると考えられるため、関係する他のプログラムを記述し、合わせて評価することによって、関係性と役割がより明確になると考える。

A. 研究目的

MSM を対象とした予防介入は多様な観点からの対象理解と多様な行動理論等を考慮することによって複雑化しており、臨床試験のように単純に無作為化比較試験を行うことは困難である。

プログラム評価はプログラムの実施過程である「プロセス」の評価と、プログラム介入の効果や成果を意味する「アウトカム」評価の2つに細分化される。これまで研究班で行われてきたクラブ調査や GCQ などのコミュニティ一般を対象にした質問票調査は、介入に曝露された群の特徴を記述するアウトカム評価にあたる。これは対象の変化からさかのぼって、実施している活動を意味づけする取り組みである。一方、活動内容自体を記述することによってプログラムを意味づけし可視化する試みがプロセス評価であると言える。いずれにおいても実態として記述することが難しいプログラムの存在と対象の変化を可視化し意味づけることが重要となる。

プログラムの効果評価のために質問票による横断調査などのアウトカム評価を利用する場合であっても、プログラム実施によって対象にどういった効果(変化)が現れると期待されるのかについて、仮説でもよいので想定しておくことは、評価の観点から大変重要である。この想定によって、得られた分析結果を恣意的に解釈することを避け、適切に効果評価を行い、活動の改善に向けた知見を得ることができるのである。プロセス評価の重要な役割の一つは、活動に直接参加するあるいは間接的に関わる人々の一致した見解のもとで、この期待される効果を想定することにある。

プログラムの可視化とアカウンタビリティ

プログラムとは、「何らかの問題解決や目標達成を目的に人が中心となって行う実践的介入」を指す。つまりプログラムの必要条件には「ゴールの存在」がある。このゴールの存在を

基本に、プログラムによる対象者の変化の道筋(why)を「インパクト理論」として記述し、そのような変化をもたらすためのプログラムの実践(how)を「ロジックモデル(プロセスマップ)」で表現することによって、プログラム全体の可視化につながる。

これらのプロセスの可視化の作業過程において、スタッフやボランティアなどのプログラム関係者がプログラムについて互いの考えを出し合い議論することにより、個々に考えている活動の目的や期待する成果等が記述や図として具体化される。この結果を利用して様々な問題や課題の発見、プログラム改善の方向性などを検討することが可能となり、間接的に活動をエンパワメントすることができる。

具体化、可視化されたプログラムの有用性は非常に高く、仮に世代や主要メンバーが交代してもプログラムの目標を維持していくことができる「記録」となるとともに、活動の効率や効果などの評価を行うための適切な評価指標(調査項目)を設定する際の根拠資料として活用することができる。また、「当事者性」あるいは「コミュニティの文化を尊重」と言った抽象的な理念概念が、どのようにプログラムの中で具体化されているのかについて、学ぶことができる。

今回取り組んでいるプログラム評価は、プログラムとその効果の間をブラックボックスにせず、説明可能な形にするための手段である。このような手段は、無作為化比較試験などの厳格な方法論の適用が現実的でない場合に有用となる。すなわち、エビデンスの提示に次ぐ「より実現可能な選択肢」としてアカウンタビリティ(説明責任)向上を目指す際に、活用されるべき手法であるとされている。運営者、ボランティア、関係者、プログラムの対象者を含めたプログラムに関わるあらゆるステイクホルダーに対して、当該プログラムが何を目指し、どのような効果が対象に現れ、プログラム全体としていかなる成果を収めることができると考えているのかという点に対して、体系的なア

カウンタビリティを果たすことが可能となる手段である。

B. 研究方法

特定非営利活動法人 akta (以下、akta) のアウトリーチプログラムに関わるコアスタッフに協力を依頼した。2011 年度及び 2012 年度に行ったこれまでのワークショップ及び聞き取り調査から得られた知見を用いてプログラムと対象に関する記述を作成した。これを用いてワークショップを行い、作成した記述に関する意見を聴き、修正することを繰り返した。

C. 研究結果

1. アウトリーチプログラムの記述

1) アウトリーチプログラムの概要

アウトリーチプログラムは、コミュニティセンター akta から、バーやクラブへ向けてコンドーム等の啓発資材を配布する活動を通して、HIV や性感染症、Safer Sex を身近なこととして意識してもらうことを目的としたプログラムである。毎週金曜日の夜に様々な人がボランティアとして集まり、楽しく参加しながら、対象区域である二丁目内にあるバーなどの店舗を訪問する。さらに、その場にいる人と会話しながら店内に設置してもらっている専用の什器にコンドーム等の資材を補充するとともに、コミュニティの状況を把握して akta の活動に反映するコミュニケーション活動である。

2) akta による新宿二丁目の理解

akta は、ゲイ・バイセクシュアルをはじめとして多様な人が集まる新宿二丁目を「多様な店舗が営業するビジネスの場」、「多様なセクシュアリティを軸に人が集まる場」、「生活の場 (ホーム、サークル)」、「注目を浴びる華やかな場 (少し特別な場、ステージ)」であるととらえている。この理解に基づいた地域の特性を生かして、この地域の人たちの生活や文化に沿った、街になじみ、受け入れられる活動とし

てセクシュアルヘルスや性感染症の予防啓発活動などを展開している。アウトリーチ活動はこれらの理解に基づき、場の文化を尊重し配慮するとともに特徴を利用した活動としてコーディネートされている。

3) プログラムの対象者

アウトリーチプログラムの対象は、新宿二丁目のコミュニティ内にある店を利用している人 (街にいる人)、店のスタッフや経営者、akta のボランティアに参加する人である。プログラムの目的は対象ごとに異なるものではない。ただし、対象ごとに結果の現れかたは異なるものと考えられる。

新宿二丁目にいない人及び来ない人はプログラムの間接的副次的な対象 (Second Audience) と考えられるが、効果を生むプロセスに外的要因が多く関わるため今回の記述からは除外した。

4) 配布する啓発資材 (コンドーム)

アウトリーチプログラムにより店舗に配布する資材の基本は、1 個ずつ包装されたコンドームである。バーやクラブなどの二丁目の人々にとっての日常の身近な所に、オリジナルデザインの個包装されたコンドームを店の客層によって種類を選択して配布している。

コンドームを配布するという行為は、活動開始当初は、旧来からある男女間の性行為に使う避妊具というイメージを、男性同性間の Safer sex の選択肢の一つとして必要なものというイメージに転換し、コミュニティ内でのセクシュアルヘルスに関する話題のきっかけとなり、タブー視されていた HIV に関するコミュニケーションが促進されることを目的とするものであった。しかし近年では、さらにコンドームの認知を向上させ、コンドームが日常の身の回りにあることが自然であるコミュニティの雰囲気を作るという目的へと変化している。

5) 配布する啓発資材の開発と配布

コンドームパッケージをはじめとした啓発資材は、デザイナーや写真家、モデルなどのコミュニティ内のキーパーソンとの協働によって開発されている。これにより、対象に受け入れられ話題性のある資材の開発が可能になるとともに、店あるいは客の好みなどコミュニティ内の多様なニーズに応じた資材を作成・配布することができる。対象のニーズに合わせた資材開発は、akta の理念及び活動全般の認知向上と、akta とコミュニティとの関係性を深めることに大きく寄与しているものである。

これらの資材は原則として郵送することなく、アウトリーチプログラムを担うボランティアによって、コミュニティ内の各店舗へ手渡しで届けられ、什器に補充される。その際、店舗ごとの什器の設置場所や店舗の客層に配慮した丁寧な配布補充作業を行う態度を示すことにより、店舗の営業に配慮するとともに、akta のメッセージを具現化した大切な資材であることを伝えることができる。

6) デリヘルボーイズのユニフォーム

アウトリーチプログラムを担うボランティアは「デリヘルボーイズ」と呼ばれる。デリヘルボーイズは新宿二丁目の「注目される華やかな場」としての文脈にあわせた、そろいの目立つユニフォームを着ることにより、活動及びakta の認知向上に役立つよう配慮されている。また、配布活動のボランティア参加者が変わっても、コミュニティ側からは同じ活動であると認知することができる。魅力的なユニフォームであることで、話題性があるとともにユニフォームをきっかけとして活動に興味をもつ人やボランティアに参加を希望する人を引き込む意図がある。

7) コミュニティで目立つ(目に留まる)魅力的で楽しい活動としての演出

akta のアウトリーチ活動では、楽しそうに

活動する、あるいは周囲から楽しくみえるように演出することが非常に重要である。目立つ目に留まる活動をすることによって話題作りになり、セクシャルヘルスや HIV に関するコミュニケーションを促進することによって HIV に関する話題のタブー視を取り払うことを狙っている。また、HIV 予防啓発のボランティアとしてコミュニティから「善いことをしている偉い人たち、活動している人」ととらえられてしまうことによって、新宿二丁目の文脈から外れ、特別視されてしまう。これより、コミュニティ「内」の活動というピア性が失われてしまう。そのため、新宿二丁目の街の雰囲気にならないうような楽しい活動であるというように内外から感じられるように工夫をしている。また、ボランティア参加者はサークルのような楽しい活動に気軽に参加し、他の参加者とコミュニケーションすることができることで、参加を継続する動機となるばかりでなく、知り合いを気軽に HIV 予防啓発活動に呼び込むことができる。

8) ポジティブなセクシャルヘルスのシンボルとしてのデリヘルボーイズ

活動の浸透により、デリヘルボーイズがakta の広告塔としてセクシャルヘルスや HIV/STI に関するポジティブなイメージを想起するシンボルとなることをねらっている。ここでいう「ポジティブ」とは、「楽観」とは異なり、「正しく偏見のない知識を持ったうえで、否定や逃避的ではないものの見方をすること」を指す。HIV 啓発活動に対する旧来のイメージを取り払い、身近なコミュニティの人がやっている、若い子が楽しそうに頑張っているなどの表情を見せることにより、HIV やその啓発活動に偏見のない前向きなイメージを持ってもらうことを目的としている。

9) 顔の見える活動

継続して定期的に街を歩き、店舗を訪れるこ

とによって、HIV/STI の問題や akta の活動を可視化し、akta の活動には主体（人）があることを印象づけ、コミュニティとの信頼関係の構築と維持をする役割を持つ。コミュニティの情報や雰囲気、akta からの資材や情報の受け入れられ方などの活動に重要な情報をリアルタイムに直接得ることができる。コミュニティ全体と akta とをつなぐ懸け橋として、双方向のコミュニケーションを行うネットワークの基盤となっている。

10) ボランティア参加者

ボランティア参加者は毎月数名ずつ新規参加者が入るが、活動に参加しなくなる人もいる。単なる配布作業ボランティアになりがちな活動への参加継続のために、楽しいサークル活動のような雰囲気づくりを心掛けている。毎回のアウトリーチ活動後には akta スタッフとともにミーティングを行い、活動におけるストレスや問題点など含めた意見交換を行っている。

ボランティア参加者への啓発は明示的に行われるもの(勉強会)とそうでないものがある。

11) ボランティアに対する明示的な啓発

月に一度、アウトリーチ活動に参加するボランティア対象として勉強会を開催している。活動の振り返りや理解の促進、今後のモチベーションアップさらにはアウトリーチ以外のプログラムに関わる機会や他団体と関わる機会を提供している。コミュニティやセクシュアリティなど幅広い内容について知る機会を設けている。デリヘル勉強会では全体の活動の中でのアウトリーチ活動の位置づけと、その重要性や効果を示すことによってモチベーションアップを図った。HIV の他にセクシュアリティやコミュニケーションスキルの問題など様々な事柄について体験したり考えたりする機会となっている。

12) ボランティアに対する非明示的な啓発

新宿二丁目というコミュニティに出始めたばかりの人にとっては、コミュニティに接する初期段階で性感染症や Safer Sex に関する正しい知識を得て、考える機会となる。そのため、ボランティア参加の敷居はできるだけ低くし、誰でもが気持ちよく参加できる活動となるよう配慮している。また、なかなか入ることができない様々な店舗をボランティアスタッフとして見て回り、コミュニティの人とのコミュニケーションし、様々なシーンを体験できる。これによってコミュニティへの帰属意識が生じ、コミュニティ及びその課題に対しての理解が深まることが期待される。

2. プログラムゴールの構造

プログラムのゴールは、akta の活動方針に基づいて、プログラムが目指す方向を提示するものである。ゴールそれ自体は測定可能でなくてもよく、極端に言えば必ずしも達成可能でなくても方向性が示されていれば良い。一つのプログラムですべてのゴールを達成する必要はない。また、一つのゴールは複数のプログラムによって達成してよい。akta のゴールを図 1 のように図式化した。

3. インパクト理論

ゴールの構造を明確にした後、ゴールの達成に向けて、プログラムによって「対象者がどのように変化するか」をインパクト理論によって図式化した(図 2)。プログラム実施によって、対象者はどのような道筋で変化を遂げて、ゴールの状態へたどり着くかを表現したものである。インパクト理論は、プログラムを実施したことによる参加者の変化の部分にのみ焦点を当て、実際にそのような変化を起こすために必要なプログラムの運営状況については、ロジックモデルでの検討課題となる。

4. ロジックモデル (プロセスマップ)

本来のロジックモデルは、プログラムの投入資源、活動、活動の結果、短期的成果、中長期的に期待する成果に分けて考え、各要因及び要因間に存在する関係性を「もし～ならば...する」という一定の論理(ロジック)によって可視化したものである。この論理は関係者が想定する仮説で構わない。今回作成した図3は、アウトリーチプログラムのロジックモデルである。作成に当たっては、インパクト理論で想定しているプログラム全体としての活動目標を見据え、プログラムで展開されている要素をモデル化して表現している。しかし、図3にはロジックモデルの特徴である矢印が描かれていない。これは一つの活動要素が複数の短期的成果を期待しており、仮にロジックの矢印を引いたとしても複雑に交わり、見づらくなってしまふことと、プログラムリーダーらとの会合で矢印を引かないほうがモデルとして受け入れやすいとの意見を得たため、矢印での詳細な論理づけを表記しないこととした。そのため、いわゆるロジックモデルではなく、活動とゴールのプロセスをモデル化したという意味でプロセスマップという言葉を用いた。

5. 図中に出てくる用語に関する注記

「ポジティブな認知」とは、「楽観とは異なり、正しく偏見のない知識を持ったうえで、否定や逃避的ではないものの見方をする」とを意味する。

「リアリティ」とは、「どこか遠くの自分が属さない別の世界の話ではなく、自分の属するコミュニティで身近に起きている現実であり、自分自身に関わる」として考えることを意味する。

6. 評価質問とデータの提示方法

このプロセスマップの各要因に沿って評価質問を設定し、アカウントビリティ向上及び活動の改善に利用するためのベンチマーク指標

として必要となるデータと関連付けながら検討したものが表1である。

D. 考察

評価の継続と活用

アウトリーチ活動と、aktaの活動目的と目標との関係性を図示し、全体における活動の位置づけを示すことができた。さらに、インパクト理論とプロセスマップ(ロジックモデル)を用いて、対象者がどのように変化し、ゴールの状態に至ると考えているか、そしてそれをプログラムにおける具体的な行動としていかに反映しているのかについて記述した。

今回評価はコアとなるスタッフを中心に作成した。これをもとに関係者に問い、意見交換することによって妥当性の高いものに近づいていくと考える。

CB0の活動を、プログラム評価あるいはプロセス評価によって記述することにより期待される効果は以下の6点である。スタッフ及びボランティア等あるいはステイクホルダーなどのプログラム関係者が個々に持っている活動の目的や期待する成果に関する理解を整理することができる。(共通理解の生成) プログラムの改善や適切な配分などを考えることができる。(マネジメントの促進) 活動の効率や効果を評価するための適切な指標(調査項目)を設定することができる。(効果評価指標の検討) 新しく活動に参加しようとするボランティアや同様の活動を行おうと考えている他地域のCB0あるいは行政や出資者等が、プログラム全体を容易に理解することができる。(説明のツール) すでに同様のプログラムを行っているCB0や地域の活動と比較する際にモデルとして用いることができる。世代や主要メンバーが交代してもプログラムの目的・目標を維持していくことができる。(目標の維持) 今後はこれらへの活用を進めつつ、同時に妥当性の向上を行っていく必要がある。また、他のプログラムとの相互の関係性の理解のため

に他のプログラムにおけるプロセス評価の実施が望まれる。ただし、可能な限り評価に関する CBO の負担を軽減できるよう十分考慮すべきであり、評価のパッケージ化等の汎用ツールとしての利便性向上も行わなければならない。記述した際に使用した用語は、活用の際にはさらに具体的なものに置き換えるか、注釈をつけて解説が必要となる。プロセス評価を効果評価の指標を考える際には、セクシュアルヘルスやセーファーセックスの定義、その中でのコンドーム使用の考え方などについて、akta を中心に議論を進めていく必要があると考える。

E. 結語

評価目的と積極的活用へ向けて

今回のプログラム評価の目的は、効果的な HIV 予防啓発活動実施のための支援である。プログラム評価によって実践活動を記述し、図として具体化し、モデル化することによって、当該プログラムの何が効果を生み出していたのか、あるいは改善点はどこか、他地域で同様の目的で応用する際に必ず押さえておくべき要素は何なのかといったプログラムの質向上・改善につなげる、さらには他の類似の活動との違いについて議論することが可能となる。そのためには、このプログラム評価の実施とその結果に関して、当該プログラムを行っている CBO が主体的に活用していくという認識を持つとともに、評価者は利用しやすい評価を行うことが必要であり重要になる。

F. 発表論文等

(印は当研究班に関連した発表論文等)
(論文)

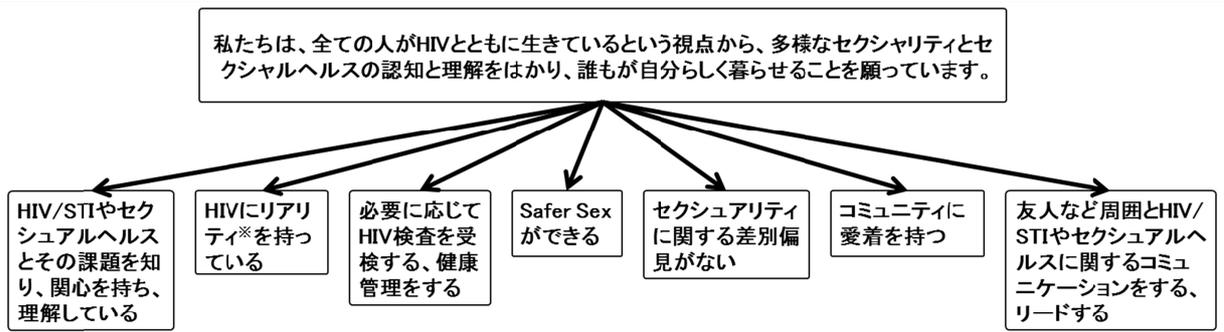
1. 松高由佳, 古谷野淳子, 桑野真澄, 橋本充代, 本間隆之, 山崎浩司, 横山葉子, 日高庸晴: Men who have Sex with Men (MSM)における感染予防行動を妨げる認知に関する検討, 日本エイズ学会誌, 15(2), 134-140, 2013

参考文献

- Aral SO. (2008). Behavioral intervention for prevention and control of STD. Springer.
- Bickman L. (1987). The function of program theory using program theory in evaluation. San Francisco: Jossey-Bass.
- CDC. (2011). Introduction to Program Evaluation for Public Health Programs: A Self-Study Guide, 参照先: <http://www.cdc.gov/eval/guide/>
- CDC. (2002). 参照先: Evaluation Guidance Handbook: Strategies for Implementing the Evaluation Guidance for CDC-Funded HIV Prevention Programs: 参照先: http://www.cdc.gov/hiv/topics/evaluation/health_depts/guidance/strat-handbook/pdf/guidance.pdf
- CDC. (2007). 参照先: Evaluating CDC-Funded Health Department HIV Prevention Programs: http://www.cdc.gov/hiv/topics/evaluation/health_depts/guidance/
- Chapel J. Thomas. (2008). From Data to Action: Integrating Program Evaluation and Program Improvement. 著: Ara I. Sevgi, Douglas M. (Eds.) John, Behavioral intervention for prevention and control of STD (ページ: 466-481). Springer, 2008.
- Chen & Rossie. (1983). Evaluating with sense: the theory driven approach. Evaluation review, 283-302.
- Chen H. (2005). Practical program evaluation: Assessing and improving planning implementation and effectiveness. Thousand Oak, CA: Sage.
- HT Chen. (2002). Designing and

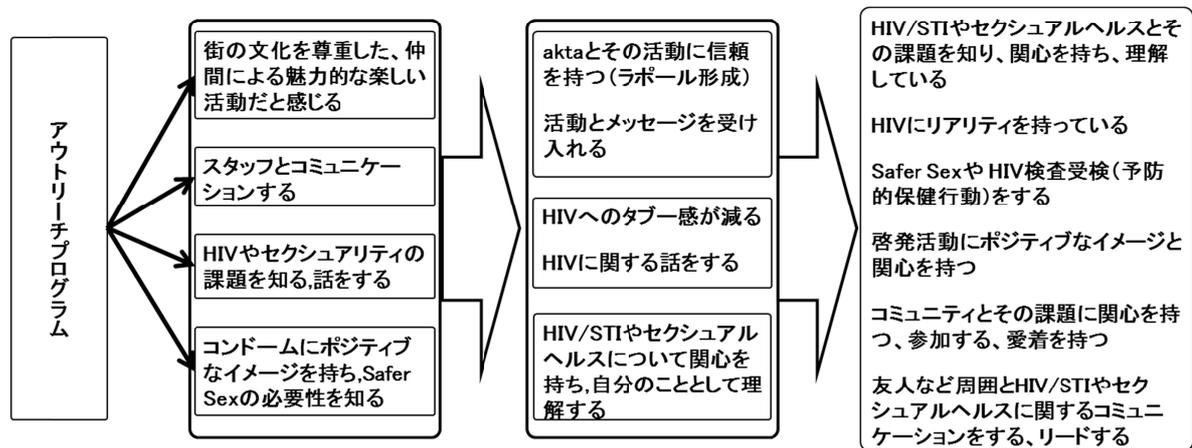
- conducting participatory outcome evaluation of community-based organizations' HIV prevention Program. Aids education and prevention, 18-26.
- J SWholey. (2010). Handbook of Practical Program Evaluation, 3ed. Jossey-Bass.
 - KnowltonWL. (2009). The logic model guide book; Better strategies for great results.
 - PainterTM. (2010). Strategies used by community-based organizations to evaluate their locally developed HIV prevention interventions: Lessons learned from the CDC's innovative interventions project. AIDS Educ Prev.Oct;22(5), 387-401.
 - PH Rossi 大島巖(監訳). (2005). プログラム評価の理論と方法: システムティックな対人サービス政策評価の実践ガイド. 東京: 日本評論社.
 - SA Kaplan. (2005). The use of logic models by community-based initiatives. Evaluation and Program Planning, 167-72.
 - SmithMF. (1989). Evaluability assessment: A practical approach. Norwell,MA: Academic publishers.
 - TMPainter. (2010). Strategies used by community-based organizations to evaluate their locally developed HIV prevention interventions: Lessons learned from the CDC's innovative interventions project. AIDS Educ Prev.Oct;22(5), 387-401.
 - United Way of America. (1996). Measuring program outcome: A practical approach.
 - W.K.Kellogg Foundation. (2001). The logic model development guide.
 - WholeyJS. (1979). Evaluation: promise and performance,. The urban institute.
 - 安田&渡辺. (2008). プログラム評価研究の方法(臨床心理学研究法 第7巻). 東京: 新曜社.
 - 安田節之. (2011). プログラム評価; 対人・コミュニティ援助の質を高めるために. 東京: 新曜社.

図1 aktaの活動のゴールの構造



※「リアリティ」とは、「どこか遠くの自分が属さない別の世界の話ではなく、自分の属するコミュニティで身近に起きている現実であり、自分自身に関わること」

図2 アウトリーチプログラムのシンプルなプロセスマップ(ロジックモデル;インパクト理論)



アウトリーチプログラムの大枠の概念(インパクト理論)では、コミュニティの人、店のスタッフ、ボランティアいずれの対象に対しても同じことを期待している。つまり、セクシュアルヘルスに関して正しい知識と関心を持ち、HIVタブー視せず、適切な予防行動を実践し、コミュニティの中でその理念を広げていけるような人になることを期待している。これらの基盤となる必要かつ正しい情報は、情報源であるaktaに対するラポールがあつてはじめて受け入れられる情報としてコミュニティに存在し、浸透することができる。

図3 アウトリーチプログラムの詳細なプロセスマップ(ロジックモデル)

aktaがしていること

活動により期待する、対象の変化や反応

対象に期待するその後の変化や状態

活動

短期的成果

中期的・長期的成果

知識獲得や理解

認知や態度、行動

- ◆ コミュニティの人々(当事者)や二丁目に集まったボランティアによる活動
- ◆ 直接足を運ぶ、顔が見える対面のコミュニケーション
- ◆ 場の文化や特徴を理解し、配慮した上で、うまく活用した活動
- ◆ 魅力的で楽しい活動として演出
- ◆ 定期的、継続的な活動
- ◆ あらゆる機会に積極的なコミュニケーションを促す配慮
- ◆ 丁寧かつ効率的な資料の配布と補充作業
- ◆ セクシュアルヘルスに関する情報提供、話題作り
- ◆ オリジナルパッケージ入りコンドームの開発と配布
- ◆ 勉強会(ボランティア参加者、店のスタッフに対して)

- ◆ コミュニティにおいて自然で違和感ない活動と感ずる
- ◆ 特別な人がやっているのではなく、自分たちと同じコミュニティの人が取り組んでいると感ずる
- ◆ コミュニティの仲間(ピア)からのメッセージだと感ずる
- ◆ 自分へのメッセージだと感ずる
- ◆ 活動に興味関心を持つ
- ◆ セクシュアルヘルスやHIV/STIに対するポジティブな雰囲気を感じる
- ◆ aktaに対する信頼感が深まる
- ◆ コミュニティ内でのピアtoピアのコミュニケーションによるラポールの形成
- ◆ HIV/STIとセクシュアルヘルスについて可視化され、話題やコミュニケーションが増える
- ◆ HIV予防啓発活動に対してポジティブなイメージを持つ
- ◆ HIVに対するポジティブな理解
- ◆ HIV/STI、セクシュアルヘルスとその課題の重要性を知る
- ◆ コンドームを認知して、その話題やコミュニケーションが増える
- ◆ コミュニティとその課題について知る、理解する
- ◆ HIV/STIに関する知識、理解の促進

- ◆ HIV/STIとセクシュアルヘルスに関して必要な情報を得ている、得ることができると感ずる
- ◆ リソースを知っている、必要に応じて活用できる
- ◆ 自分のこととして、関心を持つ、考える、理解が深まる
- ◆ HIVのタブー感が減る
- ◆ HIV/STIの話題を自由に話すことが出来る
- ◆ HIVにリアリティを持つ
- ◆ HIV/STIに対するタブー感の減少
- ◆ HIV/STIに対するリアリティを持つ
- ◆ HIV/STIに対するポジティブな理解と行動
- ◆ Safer Sexについて理解する
- ◆ コンドームは自分たちに必要なものと考えられる
- ◆ コンドームがある、使うのが自然な状況
- ◆ Safer Sexと予防行動に関するポジティブな理解と行動
- ◆ HIV/STIとセクシュアルヘルスについて、コミュニティに関わることとして関心を持つ、考える、理解が深まる
- ◆ コミュニティに帰属意識、愛着を持つ
- ◆ 自分たちのコミュニティという広い視点での理解と行動

- ◆ HIV/STIやセクシュアルヘルスとその課題を知り、関心を持ち、理解している
- ◆ HIVにリアリティを持っている
- ◆ 啓発活動にポジティブなイメージと関心を持つ
- ◆ Safer Sexについて理解し、実践する(Condom購入、使用を含む)
- ◆ 必要に応じてHIV/STIの検査を受ける
- ◆ コミュニティのHIV/STIとセクシュアルヘルスの課題に関心を持ち、それぞれのやり方で取り組む
- ◆ コミュニティに愛着を持つ
- ◆ 友人など周囲とHIV/STIやセクシュアルヘルスに関するコミュニケーションをする、リードする

表 1. プロセスマップに沿った評価クエスチョンとデータの提示方法の例

要因 (段階)	概要	評価質問(ベンチマーク)の例	データの提示方法 の例
インプット (投入資源)	プログラム実施に直接的・間接的に必要となる資源	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒト、モノ、カネ、情報などが整っていたか ・ボランティア参加者数は十分あるいは適切だったか ・配布資材の準備は十分だったか ・ユニフォーム等のアウトリーチに必要な資材の準備は十分だったか 	
活動	プログラムで行われる活動	<ul style="list-style-type: none"> ・理念や計画が適切に反映された活動であったか ・(対象に十分配慮した活動となっていたか) 	<ul style="list-style-type: none"> ・マニュアルの検討 ・マニュアルの順守度合い ・理念に沿った臨機応変な対応
アウトプット (実施結果)	活動の実施によって生み出された状況	<ul style="list-style-type: none"> ・実施時間は適切であったか ・問題なく配布・補充が行えたか 	<ul style="list-style-type: none"> ・経過時間 ・伺った店舗数 ・店舗のカバー率
短期的 成果 中長期的 成果		<p><u>ピア to ピアのメッセージととらえられているか(ラポール形成)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・”活動に興味がある特別な人”がやっているのではなく、自分たちと同じコミュニティの人が取り組んでいると感じているか ・コミュニティにおいて自然で違和感ない活動だと感じているか。 ・自分へのメッセージだと感じているか ・akta やデリヘルボーイズに対して信頼が形成されているか <p><u>HIV に対するポジティブな認知が形成されているか</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動に HIV 予防啓発に対するポジティブな雰囲気を感じたか ・HIV のタブー感が減っているか ・HIV/STI とセクシュアルヘルスに関して自由に話すことができると感じているか。コミュニケーション(会話等)が増えたか ・HIV にリアリティを持っているか <p><u>HIV/STI に関する知識、理解が促進されているか</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・HIV/STI とセクシュアルヘルスについて自分のこととして、あるいはコミュニティ全体に関わることとして関心を持っているか ・コンドームを自分たちに必要なものとして認知しているか ・コンドームがある、使うのが自然だと考えているか ・セクシュアルヘルスに関するリソースを知っているか、活用できているか <p><u>HIV/STI 予防行動に関する実践がされているか</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・Safer Sex をしているか、コンドームを使用しているか、購入しているか ・リスクに関する正しい認識のもとで、必要であれば HIV 検査を受検しているか ・継続して HIV/STI 予防行動を実践しているか ・STI 罹患状況 <p><u>ボランティア参加者について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア参加者数・登録数 ・リーダーとなるボランティアの成長 ・コミュニティへのインフルエンサー(個人的情報発信・話題発信の起点)としての役割を担っているか ・知人からの HIV/STI などの話を聴くことができるか <p><u>その他</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティに帰属意識や愛着を持っているか ・コミュニティの課題に関心を持っているか 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアへの調査(経時調査、横断調査) ・コミュニティの人(アウトリーチ先の店舗のスタッフ、客、街にいる人)への調査(経時調査、横断調査)

